



教職課程だより

CONTENTS

1	算数・数学における「よさ」と創造的な学び 教職支援室/工学部 塩澤友樹	6	教員採用試験合格への道のり 工学部 応用化学科 小林優太 システム理工学部 数理科学科 蔵谷和輝 理工学研究科 電気電子情報工学専攻 小出悠紀人
2-3	介護等体験記 工学部 情報通信工学科 村田睦朋 工学部 応用化学科 西海歩桜 システム理工学部 生命科学科 松崎夏星 システム理工学部 環境システム学科 橋上蒼龍	7	ボランティア体験のススメ システム理工学部 数理科学科 古庄愛夢 システム理工学部 数理科学科 近いつき
4-5	教育実習の体験と学び 工学部 応用化学科 廣井万結子 工学部 電気工学科 池田 倫 システム理工学部 生命科学科 早川智也 システム理工学部 数理科学科 田中美玖里	8	第12回「教職課程同窓生の集い」 教職支援室/工学部 岡田佳子 編集後記 教職支援室/システム理工学部 田中友佳子

算数・数学における「よさ」と創造的な学び

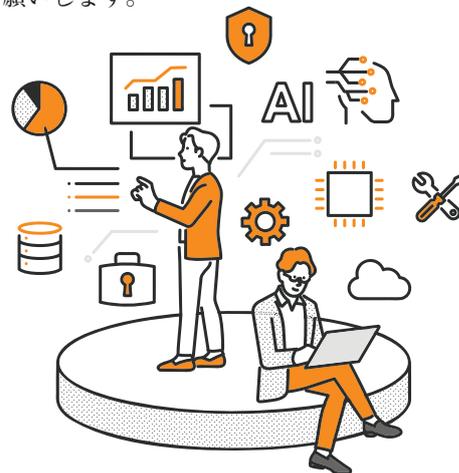
教職支援室/工学部 塩澤友樹

令和7年4月に着任しました塩澤です。専門は数学教育学(統計教育)ですが、土木工学課程に所属させて頂き、本学では土木工学を含むSTEAM教育まで研究領域を広げ、研究を進めています。本学でも多くの学生が教職課程を履修していることを嬉しく思うと同時に、今回は着任の挨拶として、算数・数学を事例に「よさ」についてお話させて頂ければと思います。

「よさ」について、広辞苑第7版(岩波書店)では「よいこと。また、その程度」(p.3027)とあり、「よい」については「①物事が質的に他よりすぐれまさっている、②正しい、正当である、③適している」(p.3008)などあり、①には美しさや利益になることも含まれます。算数・数学科の教科目標においては平成元年告示学習指導要領から「よさ」という言葉が位置付けられ、当初は小学校算数科で「数理的な処理のよさ」、中学校及び高等学校数学科で「数学的な見方や考え方のよさ」として用いられました。現在の学習指導要領では、いずれの段階でも「数学のよさ」として整理されています。さて、それでは「数学のよさ」とは何でしょうか。授業で学生に問うと、論理的思考力が身につく、科学の基礎となるなどが挙げられます。一方、子供たちからは面白い、数式がきれい、説明が簡潔、新たな発見があるなども挙げられるでしょう。これらを踏まえると、「数学のよさ」も多義的であり、算数・数学

教育でも広義に捉えられています。

算数・数学は一例ですが、大学の授業においても皆さんはどんなときに「よさ」を感じるのでしょうか。多くは「分かりやすい授業」と答えそうですが、それは学ぶ価値、すなわち「よさを実感できる授業」と捉え直せるかもしれません。子供たちも同様であり、「よさ」を実感するからこそ、学習への意欲や主体性が高まり、それが推進力になって創造的な学びへとつながっていきます。私自身も教職課程の活動の中で学生の皆さんに「よさ」を実感してもらえるように努めるとともに、皆さんが関わる子供たちにその「よさ」を伝えていけるよう、教職支援室の一員として関わっていきたいと思います。よろしくお祈りします。



介護等体験記

特別支援
学校

工学部 情報通信工学科 村田睦朋

私は東京都立城東特別支援学校で、2日間の介護等体験を行いました。私は小学部の1学級に配属され、授業への参加や給食、休憩時間の遊びなど、児童と同じ1日の活動に加わる形で体験をさせていただきました。2日間は連続ではなく、1週間ほど間を空けての参加でしたが、2日目に学校を訪れた際、児童が私の顔を見て声をかけてくれたことがとても印象に残っています。短い関わりであっても、覚えていてくれたことが嬉しく、心が温くなる瞬間でした。

体験に参加する前、私は特別支援学校に対して漠然とした不安を抱いていました。これまで知的障がいのある方と関わった経験がほとんどなく、自分の心がついていけるのか、うまく接することができるのかと正直怖さを感じていました。しかし実際に学校生活を共にしてみると、その不安は次第に薄れていきました。児童たちは皆小学生らしく素直で可愛らしく、友達と笑顔で遊び、言葉や動作を通して一生懸命コミュニケーションを取っていました。思うように言葉が出なくても、表情や行動を通して気持ちを伝え合う姿を見て、これまで自分が抱いていた漠然とした不安の中に、思い込みがあったことに気付かされました。

活動の中で、私は児童に対してつい何でも手助けしてしまい、甘く接してしまうことが多くありました。しかし先生方から、「ここは教育の場であり、駄目なことはしっかり伝えなければならぬ。何でもやってあげるのではなく、自分でできるように支えることが大切だ」と教えていただきました。支援とは守ることだけではなく、子どもが自分の力で成長していくことを見守る関わりであるという考え方は、私にとって新鮮で大きな学びでした。

今回の介護等体験を通して、特別支援教育は子ども一人ひとりの個性や可能性を尊重しながら成長を支える教育であると実感しました。学校という場が、児童にとって安心して過ごせる居場所になっていることも強く感じました。この体験で得た気づきは、今後さまざまな立場で人と関わっていく中でも、大切にしていきたいと思っています。



社会福祉
施設

工学部 応用化学科 西海歩桜

私は小学1年生から高校3年生までの児童・生徒が利用する社会福祉施設で、5日間の介護等体験を行いました。学校から施設までの送迎補助、学校の宿題やデイの課題にも職員として一緒に取り組みました。毎日違う児童・生徒が訪れる中で、一人ひとりに寄り添った支援をすることができました。積極的に話しかけて遊びに誘ってくれる児童が多く、私自身も体験中の会話や遊びを通して楽しい時間を過ごすことができました。

体験前は、言葉によるコミュニケーションを取るのが苦手な児童に対して、どのように話しかければ良いか不安でした。しかし、遊びや活動を通して、ジェスチャーや目の前にあるものを手に取りながら質問をすることで、行動や声で答えてくれました。また、ブロック遊びをしている児童に誘われたときには、ブロックを使っておままごとをしたいのか、作品を作りたいのかを直接聞くのではなく、一緒に遊んでいく中で意図をくみ取れるようにもなりました。いきなり手を握ってくる児童と、至近距離で目を合わせてくる児童に最初は緊張しました。しかし、その行動は自分自身の気持ちを伝えようとしていて、私のことも顔の表情から理解しようとしているためでした。複数人で遊ぶのが好きな児童も、1人で遊ぶのを好む児童もいて、1人で活動をしている児童には、すぐに話しかけるのではなく表情や行動の変化を観察して話しかける機会を判断するようにしました。すると、児童が自分だけで達成したいことを理解して、児童の活動を補助することもできました。

今回の体験から、感情の表現方法が児童によって異なるため、何から気持ちを読み取るかを状況に応じて判断することが重要であることを学びました。言葉による意思の疎通よりも、表情から相手の気持ちを読み取るようにすることで、相手の求めていることを理解できました。笑顔で楽しそうに遊ぶ児童たちに出会って、笑顔が親しみやすい雰囲気や安心感を与える大切なコミュニケーションであることを実感しました。今後も、相手を考えていることを理解するために寄り添う姿勢を大切にしたいと思いました。

特別支援
学校

システム理工学部 生命科学科 松崎夏星

私は埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園で2日間の介護等体験を行いました。幼稚部から小学部、中学部、高等部まで一貫した聴覚障がいに関する専門教育を行う学校で、私は幼稚部に配属になり主に3～5歳の子どもたちと交流しました。

介護等体験の日を迎えるにあたって、手話ができない自分がどの様に利用者の方々と意思疎通を図れば良いのかわからず、不安を抱いていました。当初の私は、支援とは「クラス全体を画一的に支えること」だと捉えており、自身の技術不足ばかりを気にしていました。しかし、初日の体験でその認識は変わりました。ある幼児が保健室へ行くのを拒み泣き続けた際、職員の方々がこれまでの経験を踏まえつつ、その子の様子に合わせて柔軟に対応を変えている姿を目の当たりにしました。ここで私は支援とは、一人ひとりの特徴や体調を細かく把握し、その子に合った個別のかかわりを行う事だと学びました。また、講義や難聴体験では軽度難聴者が抱える「音は聞こえても内容が聞き取れない」という特有の困難さを知り、制度上の枠組みだけではわからない実態があることに衝撃を受けました。

最も印象に残っていることは、2日目の子どもたちの交流です。初日の反省を活かし、名前を呼びながら拙い身振り手振りで積極的に関わろうとしたところ、子どもたちのほうから「こっちに来て」「ボールで遊ぼう」と声をかけてくれました。驚いたのは、子どもたちがこちらの不慣れな状態を瞬時に汲み取り、より分かりやすいジェスチャーで伝えてくれたことです。私は「障がいがあるから」と勝手に壁をつくり、距離を置いていたのは自分であったと痛感しました。言葉や手話といった手段が完璧でなくとも、相手を理解しようとする姿勢があれば心を通わせることは十分に可能なのです。

2日間の体験を通じて、私は特別支援学校に対するイメージが大きく変化しました。静かな場所であると思込んでいた学校は実際には活発なコミュニケーションと笑顔が絶えない場だったのです。どんな相手に対しても一人の人間として向き合い、自ら対話を始める勇気を持つことが大切だと知り、私の教育現場における原点となるような充実した体験になりました。

社会福祉
施設

システム理工学部 環境システム学科 橋上蒼龍

私はさいたま市にある障がい者福祉施設で、5日間の介護等体験を行いました。本施設は知的障がいを持つ入所者のための介護を行う施設で、体験時間は9時半から16時半まででした。

実際の活動としては、入所者への介護・サポートやレクリエーションをご一緒させていただきました。体験の1日目と2日目は、特に印象に残っています。まずは入所者の皆さんの名前を覚えることから始まりました。名前を覚える過程で、自分から積極的に話しかけ、入所者の特性や性格について理解を深めました。また、レクリエーションやサポートを行う過程で、「どこまでを本人に頑張ってもらい、どこから介護を行うのか」という「支援の線引き」についても学んでいきました。介護とは、何でもしてあげる「おんぶにだっこ」ではなく、「自立のためのサポートである」ということを、このとき強く実感しました。

一方で、正直なところ精神的につらい面もありました。特に初日では、どのようにサポートすればよいのか分からない場面も多く、不安な気持ちのまま終えたことを覚えています。しかし2日目になると、1日目に名前や性格を覚えたことが生き、適切なサポートがしやすくなりました。また、会話が可能な方とはコミュニケーションが弾み、最終日になる頃には、職員の方と言われる前から必要な作業や入所者の体調チェックなども行えるようになり、自分から積極的に入所者と関わろうとする姿勢が身につけていることを実感しました。

私は今回の体験を通して、介護等体験のテーマである「人間理解」について、「人間理解をしようとする姿勢」というソフトな面での学びを得ることができたと感じています。その一方で、介護の現場は決して綺麗ごとだけでは成り立たないということも理解しました。介護とは、誰にでもできることではなく、精神的な負担も大きい仕事であり、偏見が完全に払拭されたとも正直言い切れません。それでも私にとって重要だと感じたのは、おそらく完全にはなくならないであろう偏見を抱えながらも、社会で自立していくために寄り添い、積極的に人間理解に努めようとする姿勢そのものだということです。



教育実習の体験と学び

公立中学校 理科

工学部 応用化学科 廣井万結子

私は母校の公立中学校で3週間の教育実習を行いました。教科は理科、学年は1年生、部活は卓球部を担当しました。ここでは、教育実習の体験から得られた学びのうち、特に印象に残った2つについて記したいと思います。

1つ目は生徒理解と信頼関係についてです。実習先の先生方から「生徒とのコミュニケーションを第一に、教育実習に臨んでほしい」とお話いただき、休み時間に生徒とドッジボールをしたり、部活動の指導をしたりと、とにかく生徒たちと一緒に過ごし、生徒理解に努めました。私が楽しんでいるだけに見えるかもしれませんが、これらの行動は授業づくりにおいて大きな効果を発揮しました。その理由は、生徒理解と信頼関係が教科指導を含む学校教育の礎となっていることにあります。まだ打ち解けていない生徒が多いクラスで授業をした際には、生徒からの反応が思いのほか少ないように感じましたが、既によく話していた生徒の多いクラスでは、生徒とのやり取りも活発で充実した授業を展開できたことと実感しました。この経験から、「生徒との関係性が授業の根底にある」ことを理解し、授業外でも生徒に関わり続けた結果、授業で生徒の意見を引き出したり、積極的な反応を得たりすることができました。

2つ目は生徒を肯定することの重要性についてです。理科の授業では実験を行うことが多く、実験結果に対する気づきは生徒によってさまざまです。例えば、教科書的には「気泡が発生した」と記述する結果を、生徒によっては「もこもこだった」と表現することもあります。フィールドバックに悩んでいた際、教科指導の先生から「まずは生徒の気づきを肯定すべき」とご指導いただきました。そこで、気づきを肯定した上で助言したところ、生徒は記述方法や内容の理解を深めていました。この経験から、伝える前に相手の意見を受け止めることで、相手もこちらの意図を受け入れてくれることを学びました。

教育実習は忙しく、試行錯誤が続きますが、新たな学びを得たり、自分自身が大きく成長したりする貴重な機会になると思います。生徒に向き合うことを第一に、楽しみながら積極的に行動してみてください。



私立中学校・高等学校 数学

工学部 電気工学科 池田倫

私は3週間、母校の私立中高一貫校で教育実習をさせていただきました。実習期間中は中学2年生のクラスを担当し、中学2年生と高校1年生の数学の授業を受け持ちました。

実習前に抱いていた「教師像」は漠然としたものでしたが、日々の授業準備や生徒との関わりを経験する中で、その考え方が大きく変化したことを実感しています。特に心に残っているのは、生徒とのやり取りにおいて「会話」ではなく「対話」を大切にすべきだという先生からの助言です。単に言葉を交わすだけではなく、生徒の思いや感じ方に寄り添いながら向き合うことが、信頼関係を築く上で欠かせない姿勢だと気づかされました。

この「対話」の大切さを強く実感したのは、初めて担当した授業の後です。生徒から直接「こう説明したほうが理解しやすいかもしれない」と率直に言ってくれたことに最初は落ち込みました。しかし同時に、それだけ真剣に授業を受けてくれていたのだと知り、大きな学びにもなりました。その日をきっかけに、私はその生徒に毎日声をかけ、授業の感想や疑問点を尋ねるようになりました。最終週には、授業以外の話題でも気軽に話しかけてくれるようになり、少しずつ関係が築けたことを嬉しく感じました。

実際に生徒と向き合う中で、自分の言葉がどのように届き、どう受け取られているのかを意識することの大切さを強く実感しました。また、私たちが想像している以上に生徒の理解の仕方は多様であり、授業中の説明や指示一つを取っても、生徒の立場に立って考える姿勢が不可欠だと痛感しました。研究授業でいただいた具体的な指摘は、教師目線だけでは気づけない点であり、生徒の視点を持つことの重要性を改めて学ぶ機会となりました。

今回の実習は、「教育とは何か」「人とどう向き合うべきか」を深く考える貴重な経験となりました。相手の立場に立って考え、対話を大切にする姿勢は、これからの人生のあらゆる場面で活かされると思います。この3週間で得た学びを糧に、今後も自己研鑽に励み、生徒から信頼される存在に近づけるよう努力していきます。

私立高等学校 理科

システム理工学部 生命科学科 早川智也

私は3週間、母校の私立高校で教育実習を行い、高校3年生の物理を担当しました。中高一貫校で顔見知りの先生も多かったため、すぐに環境に馴染むことができました。ICT教育が進んでおり、各教室に電子黒板やプロジェクターが設置されていたため、設備の面で困ることなく実習を行えたことは恵まれていた点だと思います。

授業実習では、学力層の異なる2つのクラスを担当しました。最も苦労した点はクラスの学力や雰囲気に応じて授業スタイルを変える点です。学力が高く、能動的に学習に取り組めるクラスとそうでないクラスでは、同じ授業をしても生徒からのリアクションに差が出ます。学力の高いクラスでは、間延びしないように少し早めのテンポを心掛けて授業を行いました。学習塾でのアルバイト経験から、授業に関してはあまり心配していませんでしたが、担当の先生からのアドバイスで自分の課題を知ることができました。授業を実際に行い、授業のプロである担当の先生からのアドバイスをもとに課題を立てて、自分なりの解決策を用意して再び授業準備をするというサイクルは現場での実習でしか知り得ないものだと思います。

体育祭や掃除、ホームルームなどの授業以外での時間で生徒と触れ合う機会が多かったため、生徒ともよい関係性を築くことができたように思います。担当が高校3年生だったこともあり、進路に関する質問を多くされました。生徒が相談しやすい関係性を築くためにはわかりやすい授業を行うことだけでなく、生徒と同じ目線で物事に取り組む機会を日常的に設けることが重要だと思います。部活動では、高校卒業後なかなか顔を合わせていなかったので挨拶と近況報告をすることができ、良かったです。

教育実習は誰もが経験できることではない、非常に濃密で貴重な3週間です。様々な課題に直面するとは思いますが、ぜひ精一杯楽しんでほしいと思います。慣れない早起きや緊張で疲れが出やすくなるので、心身のコンディションに気を付けて悔いのない実習にしてください。



公立中学校 数学

システム理工学部 数理科学科 田中美玖里

私は3週間、母校の公立中学校で教育実習をさせていただきました。先生方や生徒から多くのことを学び、非常に充実した時間を過ごしました。初日、私が人前で話すことが苦手だと校長先生に伝えた際、「そういう先生もいていいんだよ」と声をかけていただき、自分なりに努力をする決意をして実習に臨むことができました。指導教員の授業を参観した際には、これまでにないほど対話的で生徒主体の授業に強い衝撃を受けました。また、どの先生も例え話が非常に上手で、数学を生徒の身近なものとして感じさせる工夫が印象的でした。

私は3年生の数学を4クラス担当しました。2日目に初めて約10分間の授業を行ったとき、自分の未熟さを痛感しました。まずは指導教員の授業を徹底的に模倣することから始め、進行、発問、板書の仕方まで可能な限り同じように実践しました。生徒たちは挙手や発言の習慣が身につけており、徐々に生徒の発言を引き出せるようになりました。授業に慣れてくると、笑いを取り入れたり小話を挟んだりする余裕も生まれ、生徒の反応もより豊かになりました。特にSHRで行ったお絵描き対決は好評で、授業中ややりとり帳で絵を描くと喜んでくれたことが印象に残っています。指導教員は私の個性を見出し、様々な助言や支援をしてくださいました。そのおかげで、少しずつ自分らしさを出した授業ができるようになりました。研究授業では〇×クイズの小道具を使い、明るい雰囲気でも授業を展開することができ、道具に頼ることも一つの有効な手段であると学びました。一方で、生徒主体の授業では即興的な対応が求められる場面も多く、アドリブでつなぐ難しさを強く実感しました。

この実習を通して、私は失敗や改善を前向きに受け止め、挑戦し続ける姿勢の大切さを学びました。長年教壇に立つ指導教員が「私も日々勉強です」と言いながら私と一緒に試行錯誤する姿から、教員という仕事の奥深さと、学び続けることの大切さを実感しました。また、先生方が出勤から放課後まで常に生徒の様子を気にかけて、どんな小さな関わりも大切にしている姿を間近で見て、尊敬の思いがさらに強まりました。

教員採用試験 合格への道のり



埼玉県
中学・理科

工学部 応用化学科 小林優太

私は2025年に、埼玉県の中学校・理科の採用試験に合格することができました。ここでは、合格までの道のりを紹介いたします。

採用試験への挑戦は、大学3年生から始まりました。埼玉県で「大学3年生チャレンジ受験」が始まった初年度でした。一般教養・教職教養の試験を3年生で受けることができたため、大学2年生の後期頃から、過去問や参考書を活用して勉強を始めました。特に、教育法規や教育時事については重点的に取り組みました。

選考通過し大学4年生になると、一次試験の続きとして専門教養試験が行われました。理科の4分野すべての試験に取り組む必要があったため、準備には多くの時間を要しました。大学3年生の選考通過後から、過去問はもちろん、参考書や全国問題集などを活用し、質も大切にしつつ、量を意識して学習を進めました。

二次試験では、はじめに小論文と集団討論が行われました。大学3年生の冬から、キャリアサポート課の橋本先生に小論文の添削や集団討論の対策をしていただきました。しかし、当日は思うようにいきませんでした。小論文では自治体の教育施策を細かく調べておくこと、集団討論では場の雰囲気を読み込まれないよう、練習を重ねておくことが大切だと感じました。

次に、理科の実験試験が行われました。試験内容は中学校で行う実験でしたが、短い時間の中で、様々な操作を丁寧にやる必要がありました。奥田先生にご協力いただき、実験操作の確認やアドバイスをいただきました。また、複数の出版社の教科書を活用し、すべての実験について注意事項を確認しました。

採用試験の最後は、30分間の個人面接でした。個人面接では、場面指導と質疑応答が行われました。一次試験終了後から、橋本先生に場面指導の進め方や、回答内容の確認などをご指導いただき、準備を進めました。

簡単ではなく、長い道のりではありましたが、多くのご支援をいただき、合格することができました。採用試験の準備は、早めに始めることが何よりも大切だと思います。

私は採用猶予をいただき、大学院を経て教員になります。改めて、教師という職に対する責任感と使命感をしっかりと持ち、教育現場に立ちたいと考えています。

横浜市
中学高校・
数学

システム理工学部 数理科学科 蔵谷和輝

私は令和7年度横浜市中学高校・数学の教員採用試験を受験し、合格をいただくことができました。ここでは、私の教育実習での学びと、採用試験に向けた対策についてお話しします。

教員採用試験に向けた本格的な対策は3年生の春休みから始めました。1次試験(一般教養・教職教養・小論文)までは参考書を軸に、単語カードを活用して進めるとともに、小論文はキャリアサポート課で添削を重ねて8種類ほどの解答パターンを用意しました。1次試験後

は2次試験に向け、実習での経験を振り返りながらキャリアサポート課で練習を重ね、様々な状況に対応できるようにしました。

時期は前後しますが、教育実習に臨んだ際には、生徒にとっては実習生も一人の教員であるという自覚を持つことが重要になると感じました。教材研究はもちろん、挨拶や身だしなみといった振る舞いが、生徒との信頼関係を築く土台になると学びました。実習現場では想定外のトラブルが起こります。その際に先生方がどのような意図で対応されているかを観察・分析したことは、2次選考の模擬対応や個人面接において、自身の経験に基づいた説得力のある解答を生む大きな武器となりました。不測の事態に冷静に対応する力は、社会人としても必要不可欠な能力だと感じています。

最後に、実習中に熱心にご指導くださった先生方、採用試験に向けて支援をくださった教職課程の先生方やキャリアサポート課の皆様にも、深く御礼申し上げます。

東京都
中高共通・
数学

理工学研究科 電気電子情報工学専攻 小出悠記人

修士課程2年次に、東京都の中高共通・数学で合格を頂きました。これを書くにあたって自身を振り返り、「やってよかったな」と感じたことを3つほど書きたいと思います。

1. 学習支援員としての活動

私は教育実習で一度教員の道を諦めたのですが、実習前に決まっていた小学校での学習支援員の活動を始めてから、再び教員になることを目指すようになりました。年単位で学校教育に携わる経験を通して、子どもたちの成長を間近で支える喜びを知ることができたと共に、自分が教員になるためにどう成長するべきなのか、より具体的に考えることができました。「こんな場所で働きたい」、「次はこういう声かけをしてみよう」という前向きな気持ちが、真剣に勉強するための、最大の推進力になりました。またそこでの経験はもちろん、小論文や面接でも大いに役に立ちました。

2. 自分にあった勉強法

私は地道に机に向かって勉強するのが大の苦手なので、テキストを開いて勉強を始めても、10分もすればYouTubeを見始めてしまいます。そこで、Google Apps Scriptで簡易的な「4択クイズ出題Rest API」を用意し、ShortcutsやMacroDroidといったアプリを使って、「〇題クイズを正解しないとYouTubeが開けない」ようにしました。小さな勉強の瞬間を、手軽に、定期的に、強制的に繰り返す方法は、知識の定着だけでなく勉強への意識をキープするという面でも、自分に合っていました。クイズで間違えたことをチェックしようとして、自然とテキストを開くことが増えていきました。

3. 橋本栄先生と小論文・面接対策

3つの中で最もやってよかった事です。教職担当カウンセラーの橋本栄先生はさいたま市立の学校長を務め、市教委で教員採用も担当された方です。そう聞くと厳格で近寄りづらいイメージを持たれるかもしれませんが、実際は気さくで褒め上手な明るい先生で、毎週オンライン面談でお会いするのが楽しみでした。4月半ば頃から、先生と二人三脚で文章推敲や面接練習を重ね、面接や小論文の経験が無かった自分でも、万全の準備を整えることができました。

私は意志が弱く、受験勉強自体に強い苦手意識があったのですが、やる気をキープし、自分にあった勉強法を活用し、一人ではなく、教職担当カウンセラーの先生と二人三脚で取り組むことで、採用試験に向き合い、勉強を続けることができ、合格を勝ち取ることができました。皆さんも、夢や将来へのビジョンを燃料にして、自分に合った勉強法を活用し、合格を掴んでください！

ボランティア体験のススメ

システム理工学部 数理科学科 古庄愛夢

私は入学と同時に、認定NPO法人さいたまユースサポートネットが運営する、学習支援教室のボランティアとして活動しています。学習支援教室では、宿題や自主学習の支援を行いながら、一人ひとりの生徒と関わっています。教える立場で活動するのは初めてでしたが、実際に関わる中で多くの学びを得ることができました。

学習支援教室には、学年や学習経験の異なる生徒が集まっており、理解の仕方や、計算の速度、正確さも一人ひとり異なります。そのため、内容を適度にかみ砕いて説明したり、あえて簡潔に伝えたりするなど、生徒によって教え方を使い分けることが重要であると感じました。また、活動の中では、学習内容の説明とは別に、どのような声かけや関わり方がその生徒に合っているかを考えました。自分から質問する生徒もいれば、ボランティアや先生を待っている生徒もいます。そのため、生徒の日頃の様子を観察したり、ボランティアとして経験の長い方がどのような声かけをしているのかを参考にしたりしながら、自分なりに関わり方を試行錯誤しました。こうした経験を通して、一人ひとりに合わせて関わり方を考えることの重要性を学びました。

学習支援のボランティアは、教える立場でありながら、自分自身も多くのことを学べる活動です。教師を目指す人はもちろん、これまで教える立場に立ってことがない人にとっても、貴重な経験になると思います。

システム理工学部 数理科学科 近いつき

私は2024年の5月から、さいたま市立春野中学校での「チャレンジスクール」というボランティア活動に、学習アドバイザーとして参加しています。大学生のうちに様々な経験を積み、子どもたちに対して色々な視点からのアドバイスができるような教員になりたいと思い、この活動に参加しました。活動としては、定期試験前の放課後や休日に、生徒たちが自主的に試験勉強をする環境を設け、生徒たちの意欲を促す声かけをしたり、分からない問題への質問に対応したりしています。

勉強に意欲の出ない生徒や問題の理解が難しい生徒から、誰から言われずとも黙々と勉強に励む生徒まで様々な生徒がいる中で、初めはどのように接すればよいのか分からず、声かけ一つにも戸惑うことが多くありました。しかし活動を重ねる中で、勉強に苦手意識を持つ子に対しては結果ではなく努力を認める声かけを行ったり、集中力の続かない子に対してはその子が興味を持つような話題から勉強につなげたりなど工夫した声かけができるようになりました。また、声をかけた生徒たちが少しずつ自信を持って取り組む姿が見られたときには、大きなやりがいを感じました。

この活動を通して、生徒一人ひとりの様子をよく観察し、その子に合った関わり方を意識することや、一方的に教えるのではなく同じ目線に立ち共に考えるという姿勢の大切さを学びました。これらの学んだこと感じたことを大切にして、今後の活動に活かしていきたいです。



2025年12月6日(土)に、第12回教職課程同窓生の集いを開催いたしました。今回は昨年に引き続き豊洲キャンパスを会場とし、オンライン参加も可能なハイブリッド形式で実施しました。当日は、卒業生11名(うちオンライン1名)、在学生31名(うちオンライン1名)と、多くの方々にご参加いただきました。教員として勤務している卒業生に加え、一般企業に勤務している卒業生の参加もあり、幅広い立場から交流が行われました。

会の冒頭では、工学部教職担当の谷田川ルミ先生より、同窓生の集いは、現場で活躍する卒業生と教職を志す在学生、そして卒業生同士が年に一度顔を合わせ、交流することを目的とした場であるとの説明がありました。

今回のテーマは「芝浦工業大学を卒業した教員の強み」とし、前半は今野恵介先生(2015年度工学部情報工学科卒、埼玉県立不動岡高等学校・数学)と倉持太陽先生(2020年度デザイン工学部卒、茨城県立つくばサイエンス高等学校・科学技術科建築領域)をお迎えし、座談会形式でお話を伺いました。お二人からは、ICT機器や各種アプリケーションへの抵抗感の低さ、デジタル採点やデジタル教科書の活用、デザイン工学で培った視点を生かした分かりやすい教材作成など、工学的背景をもつ教員ならではの実践

が紹介されました。

また、工業高校における実習指導や資格取得指導の様子、異なる専門分野への配置替えに対応するために求められる「学び続ける力」など、工業分野ならではの実情についても具体的なお話がありました。参加した在学生からは、「大学時代に読んでおくといよい本やコンテンツ」「教員を目指すうえで身につけておきたい力」など多くの質問が寄せられ、「学生のうちにしかできない経験を大切にしてほしい」というメッセージが送られました。

後半は、在学生と卒業生が少人数のグループに分かれて自由な懇談を行いました。教科や校種、勤務形態の違いを超えて率直な意見交換がなされ、在学生にとっては将来像を具体的に描く貴重な機会となりました。同窓生にとっても、世代を超えたつながりを再確認する場となり、本企画の意義を改めて実感する集いとなりました。

会の最後には、工学部教職担当の塩澤友樹先生より、登壇者お二人と参加者への感謝の言葉が述べられ、閉会となりました。今後も、教職課程の同窓生が年に一度母校に集い、交流を深める機会として、本企画を継続していきたいと考えています。



編集後記

2025年度の「教職課程だより」をお届けします。2025年4月に着任された塩澤友樹先生に巻頭言をご執筆いただきました。「よさ」を実感できる教育は、教科など教える内容、学ぶ対象、教える人、状況などによって多義性を持ち、そして常に「よさ」を追究することで叶うものだとということ、塩澤先生の教育観や学生への想いに対して深く共感しました。さて、今回は記念すべき50回目の『教職課程だより』刊行となります。介護等体験記4名、教育実習体験記4名、教員採用試験合格体験記3名、ボランティア体験記2名に、それぞれ寄稿してもらいました。介護等体験の受け入れ先である特別支援学校と社会福祉施設、教育実習先の中学校、高等学校、ボランティアを受け入れてくださっている学校やNPOの教職

員の方々、お世話になりました全ての皆様に御礼申し上げます。岡田佳子先生からは12月6日に開催されました「教職課程同窓生の集い」の報告をいただきました。今回も豊洲キャンパスでの開催となり、教職課程で学んだ多くのOB・OGと現在教職課程で学んでいる在学生に参加していただきました。毎年交流ができること我々もとても嬉しく思います。この教職課程だよりを通じて、本誌をお読みいただいた教職員の皆様や、教職を履修していない他の学生さんたちにも教職課程の様子が少しでも伝わったら嬉しく思います。今後も教職課程および教職を履修する学生についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(教職支援室／システム理工学部 田中友佳子)